

第1回大学魅力アップ有識者検討会議（議事概要）

日時 平成19年9月12日（水） 午後2時から4時まで

場所 新潟市中央区新光町 興和ビル 会議室

出席者 伊藤委員、大竹委員、親松委員、小林委員
西井委員、船戸委員、山岸委員（会長）

【会議の内容】

- 1 開会
- 2 副知事あいさつ
- 3 議事
 - 議題1：設置要綱及び会長選出について
事務局から各委員に説明。
会長選出については船戸委員の推薦により、山岸委員に決定
 - 議題2：大学・短大を巡る現状と課題
各委員の意見説明（別紙1のとおり）
意見交換（別紙2のとおり）
- 4 傍聴者との質疑応答（別紙3のとおり）

別紙1 各委員の意見説明

【船戸委員】

魅力アップは国公立を問わずそれぞれの大学が取り組むべき課題である。各大学が魅力を出していく努力をした上で、全体としてゆるやかな連合体を目指していくというのが理想だ。具体的には各大学が徹底的な自己点検を主体的に実施することが重要。自己点検は自らの大学を発展させるための手段である。

それぞれの大学の持つ魅力を打ち出して行くという意味で、地震シンポジウムを提案した。工学的な面、福祉・ボランティアの面などすべての県内大学が何らかの形で関われるテーマだ。

【西井委員】

魅力アップについて、県全体の大学・短大を維持・発展させることと、個々の大学がどのように魅力をつくっていくかということは違うと認識していただきたい。その上で、大学の入口、中身、出口の段階で個々の学校が魅力を上げる有効な方策は色々ある。中身で言えば教育・研究よりもむしろ学生の生活環境、アメニティを充実させることも考えられる。

また、ひとつの大きなテーマとして、地域にとっての大学の価値を高めるという問題がある。大学のある地域自身が高等教育機関を残す意味を考え、地元で高等教育を受けた人材をどう養成するのか、大学と地域が相互に連携をとることが大事だと思う。

【親松委員】

各大学は、魅力アップのためにいろいろやっている。それらをもう少し高校生及びその保護者にアピールする方法を考えるべきだ。「高校と大学との連携」という意味では、出前授業などを行うこと、「地域との連携」では地元商店街と結びついた活動を展開していくことを推進していくべきだ。

【小林委員】

大学の魅力をアップするという話は経営の話であり、人材を留め置き、企業に送り込んで生産性を高めるというサイクルができなければ意味がない。県内に留め置くことができるターゲットを見据え、生徒や保護者、先生を対象にした県内大学の合同説明会を開き、企業ガイダンスのように大学から出向くような形のものがあるとよい。行政には資金面で大学のチャレンジを支援してほしい。

【伊藤委員】

若い人たちの大学に対する評価は、ある意味で大学としてのブランド力だ。これをいかにつくるかが問題だ。各大学がそのブランド力を高めて行く上で、強いメッセージ性が必要だが、このためにはオンリーワンであるという気概を持つべきだ。船戸委員からの、二回の震災経験を活かし、災害に強い県というイメージ発信に繋げていくべきとの指摘は、ありがたい意見だ。県内の大学が得意な分野を持ち寄って、地域全体に広げて行くことは検討すべきだと考える。

また、平成14年の保護者アンケートで、経済的負担を理由にできれば県内に進学させたいという意見が70%あった。各大学は様々な学生支援を行っており、もっとPRが必要だ。全大学がまとまって合同説明会を開催し、理解が十分でない地域に対して理解を深めてもらう試みをしてはどうかと思う。

【大竹委員】

新潟県でも高校を卒業する2人に1人が大学等に進学する時代になった。ただ、大学を目指す高校生の学力の層が広く、二極化しているのは確かだ。

高校生の目から見た場合、質の高い教育を提供しているか、最先端の研究に近づけるか、学びのスキルアップができるか、特色が明確か、キャンパスライフが豊かか、人的なネットワークが広がるか、などが大学の魅力なのではないか。また、入口論としては、決してハードルが低ければよいというものではない。出口論については、学びを活かした職につける大学なのか、全国的に就職機会があることも魅力だ。

県内の大学・短大全体として高校生を総体として育てていけるような改革ができると新潟県の高等教育機関として魅力を感じる。

【山岸会長】

県外流出を抑えるために地元の大学を魅力的なものにするというのは賛成だが、その大学に入学する人たちが、その大学を魅力的なものにするために何ができるのか。つまり、大学から魅力を与えてもらうのではなく、学生に魅力を考えてもらう方法はないものか。

日本の進路指導はランキングの高低で決めているが、そういう進路指導ではなく、高校生の生き方を一緒になって考える指導というのがあるのではないか。そういう指導ができれば、大学の魅力アップのひとつのやり方が可能になるのではないかと漠然と考えている。

2 意見交換

【小林委員】

新潟県大学ガイダンスセミナーや県内大学入試懇談会は、生徒本人やその保護者を対象としたものか。

【大竹委員】

高校の進路指導を担当する教員などが対象で、大学との意見交換の場ということで実施している。

【小林委員】

全県の大学が全県を対象にしたものか。

【大竹委員】

新潟開催であれば下越周辺の大学が集まる形だ。中越周辺の大学と意見交換ということであれば中越まで足を運んで頂くイメージだ。

【山岸会長】

新潟大学に進学した学生の大学に対する満足度はどうなのか。

【伊藤委員】

新潟大学の卒業生から大学に対する評価及び卒業生の就職先の卒業生に対する評価についてアンケートを実施して、プラスとマイナスの評価、意見をそれぞれ頂いている。

卒業生は企業に送り出す商品であると言えるので、いかに磨くかということは重要なことであり、企業の求める人材像とのミスマッチが起きないように取組が今後重要であると考えている。

【山岸会長】

今の話は卒業生のものであると思うが、入学する段階で学力の高い学生が見る新大像という部分では難しい問題があると思う。どのような対応を考えているのか。

【伊藤委員】

常にいい人材にきていただきたいので、今後は高校生以前からの動機付けも検討していきたい。

【山岸会長】

新潟県内の高校は事実上ランキング分けをされているが、大学選択と結びつけて考えた場合どのような問題、特徴があると考えているか。

【大竹委員】

高大接続事業である「君も一日新大生」や難関校進学をバックアップする大学進学率ランクアップ事業に取り組んでおり、進みたい大学に進めるような環境づくりをしている。ようやく新潟県も全国に肩を並べるレベルになってきた。それなりに取組の成果が出てきていると認識している。

【山岸会長】

学力の高くない生徒が集まる高等学校はどうしているのか。

【大竹委員】

学力に限らず、それぞれの高校がそれぞれの課題に取り組んでいる。

例えば、南高校の生徒は、入学してくる時点で、学力が高くても「いえ、新潟大学です。」という生徒もいる。個々の生徒の家庭環境等を踏まえた総合的な指導はしている。

【山岸会長】

あまりに受験産業のランキング、偏差値騒ぎが強い現状がある。その中で50を切ってしまった大学が「個性を創る」ことは可能なのか。

【船戸委員】

大学でランキングがつくのは上位50校、入試が成立するのはせいぜい上位70校だと思う。その他の大学は選んでもらうには特色を出すしかない。特色はカリキュラムに反映されるはずだが、県内の大学でそれがパンフレットからわかるころはなかった。スローガンはあるが、それをカリキュラムに落とし込んで大学が魅力を打ち出す必要がある。そういう取組により個性を創っていくことは可能だ。

【山岸会長】

上位50校、70校についてはどのように見ているか。

【船戸委員】

上位50校、70校は経営的な体力があるので改革のために様々なことに取り組める。しかし、県内の大学も含め、全国のほとんどの大学はそのような環境にない。従って、上位50、70以外の大学の改革が重要だということになる。

【山岸会長】

本日の会議をまとめると次のとおりになると思われる。

大学の魅力は各大学が取り組むべきことであり、行政はサポート役に徹し、「大学はかくあるべき」というようなことは言わないというのが基本的な認識のようだ。

第一の課題は入口と出口の問題の大切さを認識する必要があるということ。裏返せば、現状ではそういう認識がなされていないのではないかという指摘かと思う。

また、第二の課題は地域に大学を残す、地域に大学を残させる、地域はそういう大学にどう対応するか。それを地域自身が考えなければならないという指摘もあった。

私自身とすれば、今、指摘された事柄について、具体的にその中身がどういうことなのかを明らかにする必要があると考える。つまり、教育の世界は建前と本音が乖離し過ぎている。かといって身も蓋もない話を繰り返してもしょうがない。可能な限り事実がどうなっているのかを明らかにして議論する必要がある。従って、有識者各位の文章化されているご意見や本日の発言の事柄から、もう少し詳しく突っ込んで具体例を考えてみるのが重要だ。

特に、私は、高等学校の進路指導を巻き込んで魅力ある大学づくりをやらなければならないと考えている。そうしなければ、どんなに頑張っても、大学だけでは、特に

多数の大学、一割から七割くらいの大学の魅力アップは無理だと考える。

こういったことをやらなければ大学が潰れるという話もあるが、それ以前に、もっと何かやり方が無いのか。大学の魅力を高めるための具体的な方策は無いのかということがこの検討会議に課された命題だ。

そういう取組を有効に支援するためにはどうすべきかということについては、今日の議論の中では進展していなかったが、やはり重要なことになるのではないかと考えている。

【大竹委員】

進路指導が次回会議のテーマのひとつになるかと思うが、南高校だけでなくいろいろな高校が、大学の研究室に直接訪問している。例えば、南高校では、新潟大学、新潟薬科大学などの地元大学、東京理科大、筑波大学などにも行って、生徒が直接大学の先生の指導を受ける。最先端の研究テーマに触れてくるので、モチベーションの高さが全く違う。更に、米国のハーバードやMITなどにも行って、通り一遍の進路指導ではなく、そういった実体験を通じて本当に何がやりたいのかを考えさせる指導を始めている。

【山岸会長】

いい取組だとは思うが、頭のいい子は放っておいてもやる。私は、上位二割の高校よりも、残りの八割の高校が大学をどのように選ぶのか、選ばせようとしているのかの問題に関心がある。これはなかなか表に現れない。この答を南高校の校長先生に求めるのは無理なのは分るのだが、重要な問題だと考えている。追々、議論していきたいと思っている。

別紙3 傍聴者との質疑応答

【A大学】

この会議は県内大学を支援するための魅力アップについて検討するのか、それとも県内の若者に県内の大学への進学を奨めるための方法を検討する会議なのかお聞かせ願いたい。

【文書私学課長】

基本的には両方をターゲットとしている。県内の大学の魅力を向上するには何が必要なのか。また、それを県がどのようにサポートできるのかを検討することが目的だ。そして、県内の大学の魅力が向上し、県内の若者が県内の大学を目指すようになれば人口の流出が抑制されるという効果が期待できると考えている。

【A大学】

若者やその親に対して県内の大学に進学しない理由を聞いた基礎的なデータはあるのか。

【文書私学課長】

具体的にアンケートはとっていない。学校基本調査等に基づくデータなどはある。

【A大学】

機会があれば南魚沼地区、旧大和町をサンプル調査するとよい。国際大学という外国人のたくさんいる大学院があって、北里という専門学校があって、看護師を目指す学生がいる。雪国やまと病院があって医療を提供している。農業が基幹産業だが後継者がいない状況。スキーや温泉も今はだめだ。大学を出ても自宅からの勤め先はない。新潟まで40分、高崎まで40分。なら、群馬大学に行ったほうが良いとなる。実態をしっかりと押えないと、抽象論だけで終わってしまう。

【文書私学課長】

南魚沼市については、以前から学園都市構想があるが、取組が始まっている。ご意見については承った。

【B大学】

県内高校を回って感じたことだが、高校の先生にはかなり偏差値信仰があるのではないかとの印象を受ける。ある高校では、有名大学の入学実績は掲出されているが、本学への入学者がいたが掲出されていなかった。また、ある進学高校に行ったときに、「当校には美術系の大学に進学する生徒はいない」といわれたが、同じ高校の生徒が、大学説明会のときに話を聞きに来ることがあった。高校の先生、保護者も含めて、全体に偏差値信仰、難関校志向が依然としてあるのか。

【大竹委員】

大変耳の痛いご指摘だが、実際にそのようなことがあったということであれば、そういう認識の教員がいるということは否定することはできない。

しかし、わたくしどもは、新潟県の高校生は学力が低いんだということにならないように、希望する大学に進学できるように、高校で実力をつけさせたいということで

取り組んできた。ただ、一部だけではなく全体の底上げをしなければ、生徒の進路希望の実現にはならないと大方は思っていると思うが、ご指摘があるとすれば、現実にはそういうことがあることも否定はできない。

【B大学】

これは意見になるが、大学の魅力アップとともに新潟県の地域としての魅力アップを一体として進めることが必要だと思う。

【西井委員】

私学の関係だが、今年度は、下り坂だったものが一段落して、良いように見える。しかし、実態的には、増えた分の大半は、東京の六大学や関西の大手大学が学部改組や試験会場入試や全学部統一試験などによって増加した結果だ。それを除けばほかの大学は決して増えている状態ではない。今年は去年とほぼ同じ、全国221校が定員割れとなっているが、新潟県については、10校の平均の志願倍率が2.7倍、定員充足率が105%で、定員割れは10校中5校、短大5校中2校の状態だ。105%という充足率は、全国平均を下回っている。そういった面から見ればまだまだ収容力はある。

次に、なぜ、定員割れが発生しているか。定員割れしている学校は魅力がないからだという見方もある。もちろん、様々な現代的なニーズに対応していない面があることも認めなければいけないが、私の見たところ、定員割れしている大学は、定員をオーバーしている東京の大手の大学より一所懸命やっているし、時代の要請に応えようとしている。いろいろ努力はしているが、報われないという状況にある。それは、高校生が大学の魅力を見ない。つまり学校の名前、ブランドで評価して、外見上の評価が上の大学から指定席が埋まっていくためだ。従って、大学の中身をアピールをしない限りはその良さが分らない。そこを一所懸命やっけて行くことがこれからの大学の魅力アップになる。

一方で、学生が集まっているところがいいところかという決してそうではない。国立大学も含め、単にブランドや名前に安住しているところもある。本当の大学の魅力はこれから作って行かなければならない。東京の六大学、早稲田、慶応義塾大学などにおいても、大半の入学生は第一志望かというそうではない。私立大学の入試の場合は、確実に合格する人は来ない。他大学に落ちて、ギリギリの人が入学する。従って結果として不本意入学が多い。この不本意入学の学生に付加価値をつけて満足させるのが大学の使命だ。入口の段階で志望しない人たちに対して、付加価値の魅力をアピールすることが重要だ。

ところで、定員割れを悲観的に見る必要はない。新潟の場合には、私立大学に入る人が少しずつ増えている。今後更にアピールして行く努力が必要だ。また、高校の側からも、しっかりと大学の魅力を見てほしいと思う。これからの時代は、大学を出たからではなく、大学を出て何ができるかが問われる。大学のブランドはトップ校でなければ意味は無くなってくる。となればそこでの付加価値が勝負となる。その意味で大学の努力や先生の役割も大きく、そういう魅力づくりが必要だ。

【C大学】

今後大学の魅力アップのためにやらなければいけないことはFDだと思う。来年度から国公私立すべてにFDが義務付けられる。

委員の皆様には現場では漢字や割算ができない生徒に学問の楽しさをどう教えれ

ばいいのか悩むということが起こっているということを知ってもらいたい。

【山岸会長】

大学の実情についてはいろいろな認識があるが、ここまで絞った形で議論をしても、認識に幅がある。あなたのこういう認識は違う、ということとは言えない難しさがある。抽象的で申し訳ないが、今後の議論の中では、それぞれの認識にある程度配慮をしながら、調整を取りながら議論を進めて行かなければならないと考えている。